

令和6年度北陸地域の大豆生産推進に向けた 県担当者会議（概要）

北陸農政局生産部生産振興課
令和6年8月5日（月）開催

大豆生産推進に向けた県担当者会議概要①

●背景

- ・今般、食料・農業・農村基本法が改正され、食料自給率目標に加え、食料安全保障の強化が明記。
- ・近年、世界及び国内の大豆の需要量は増加傾向で推移。輸入に依存する大豆の安定的な供給を行うには、国産大豆の生産拡大が必要。
- ・国産大豆は外国産に比べ高価なこと等が課題であったが、輸出国の生産動向等による相場の変動、国際物流コストや為替等の影響により、外国産非遺伝子組換え大豆と国産との価格差が縮小。
- ・農研機構で多収性、病害虫抵抗性、難裂莢性等に優れた品種を育成。国産大豆の安定生産と供給を後押しするものとして普及に期待。
- ・産地に適した品種や栽培技術の選択のほか、用途別に求められる品質や数量に対応した生産体制の整備が必要。

●生産面の課題（各県）

- ・収量、品質の確保のための圃場・栽培管理等の基本技術の励行。
- ・地力消耗による単収低下の抑止に向けた、土壌診断に基づく土壌改良の励行。
- ・産地の団地化や機械の導入、施設整備等による作業体系の効率化及び産地に適した営農技術の導入や適期作業が行える体制づくり。
- ・近年は、温暖化による青立ち、しわ粒の発生や吸汁性カメムシによる収量、品質の低下問題が発生（特に青立ちが課題）。
- ・北陸地域の風土に適した、かつ温暖化を見据えた品種の育成や栽培技術の開発に関心と期待。

大豆生産推進に向けた県担当者会議概要②

● 品種及び栽培技術の開発状況（農研機構）

【栽培技術】

- ・農研機構標準作業手順書（SOP）を広く公開することにより、新技術やその作業手順等を解説している。

【品種】

- ・各地の試験場等で難裂莢性、耐倒伏性、病害虫抵抗性、葉焼病抵抗性系統を開発・育成中。
- ・東北南部～北陸地域を栽培適地とする「そらひびき」は外国多収品種と国産優良品種を交配した多収系統の品種特性として「里のほほえみ」と比較すると20%程度の収量増が期待でき、品質・蛋白はやや低く、粒大は小さい傾向にあるところ。国内食品用（豆腐、納豆など）向けの加工適性も良好。

● 新品種「そらひびき」の試験結果（JA全農いしかわ）

- ・令和5年度は2法人で「そらひびき」の試験栽培を実施（比較対象品種は「里のほほえみ」）。
- ・成熟は「里のほほえみ」より1～2週間早い。収量は高いが、粒径は小さく、形状は楕円形のものが多く見られた。
- ・最下着莢位置は低いものの、オートセンサーによって刈取位置が自動調整されるコンバインを用いた場合、刈取ロスは僅かに留まった。
- ・「里のほほえみ」同様、青立ち被害の発生がみられた。
- ・楕円との粒形から播種機の調整に苦労したが、2年目にはばらつきなく播種できた。

大豆生産推進に向けた県担当者会議概要③

● 国産大豆に対する実需者からの要望（株式会社金城納豆食品）

【現状】

- ・ 近年、輸入大豆の使用割合を減らし、国産大豆を増やしている。
- ・ 石川・富山産大豆は品質と供給量の安定感から需要者の引き合いも良く販売量も増加傾向。
- ・ 試験的に納豆加工用として「そらひびき」を使用した¹が、従来使用する品種同様味、粘り等、加工上の問題はなく、安定した価格と量があれば有望と考える。

【要望】

- ・ 納豆業界全体として小粒大豆の増産を望む。
- ・ 「そらひびき」については適正な価格形成と安定供給の確保のため、産地には品質と供給の安定化に向けた生産体制の確立を望む。

● 流通について（JA全農）

- ・ 営業倉庫に保管されているR5年産大豆の販売進度が悪く、在庫の消化が停滞。
- ・ 懸念されていた2024年問題は現時点で大きな混乱は無いが、引き続き人件費や保管料高騰による流通経費の増加が見込まれる。

● 今後の対応

- ・ 大豆生産の優良事例や品種、ほ場特性に応じた栽培技術など、ホームページ等を活用した情報発信を行う。
- ・ 需要増に応じた生産拡大に向け、生産者や実需者等を招き、大豆に関する自由な情報・意見交換の場として「北陸大豆サロン」を開催する（R7年1月予定）。